デュマ「銃士三部作」を読む—歴史と文学的想像力（4）『ブラジュロンヌ子爵』後編

Reading Dumas' Trilogy of Musketeers, part 4

矢橋　透
Toru YABASE

前回を引き継ぎ，今回は長大な『ブラジュロンヌ子爵』の後半の内容を要約紹介し，それに分析を加えるとともに，三部作に関する考察をまとめたい。

『ブラジュロンヌ子爵』の作品世界（承前）

若きルイ一四世の宮廷では，あいかわらず華麗かつ変転極まりない恋愛絵巻が繰り広げられていた。バッキンガム公爵がイギリスへと帰ったのち，王弟妃アンリエットとフランス宮廷一の伊達男ギーシュ伯爵の仲が急接近する。だが，王弟フィリップはまたもそれに嫉妬し，国王はギーシュに自領で謹慎するよう命じる。だがそうしたルイの処置も，弟の体面を気遣っただけであったのかは疑わしい。というのも，祝宴のため宮廷が移動したフォンテーヌブローで，今度は国王と王弟妃の仲が宮廷の耳目を集めることになるからである。ふたりは仲睦まじく水浴に出かけ，あとに残された国王妃マリー＝テレーズとフィリップはほぞを噛む。そんななか，「四季のバレエ」という一大イベントが催されることになり，それに参加することになっていたギーシュが，王の不興も顧みず，アンリエットに会うためにフォンテーヌブローに参上する。だが，ルイとアンリエットの仲を見せつけられた彼は，踊りもままならず，春の神を踊る輝かしい王に圧倒されて，失意の底に突き落とされる。

しかし，ここでまたもや変化の兆しが表れる。国王と王弟妃は，仲が公然化するのを防ぐために，ルイが他の女を想っているように見せかけることにする。そしてその白羽の矢が立ったのが，ことあろうラウルことブラジュロンヌ子爵の許嫁ルイーズ・ド・ラ・ヴァリエールであった。だがここで，愛の神の気まぐれが……フォンテーヌブローの森のなかにある王の樫と呼ばれる巨木のしたで，ラ・ヴァリエールとモンタレーそしてトネー・シャラントという王弟妃に仕える三人の侍女が，恋愛談議に花を咲かせ，ルイーズがそこで気持ちの高ぶりから国王にたいする自らの秘め続けてきた想いを告白してしまう。ところがなんと（！），それを木陰に隠れて聞いていたのが，ほかならぬルイとその廷臣サン・テーニャンであった。誰かが自分の告白を聞いていたと知ったルイーズはパニックを起こしその場から逃げ，さらには気絶してしまう。それをやさしく介抱したのがルイで，そのとき王の心にもある変化の兆しが表れていたと考えられる。その後すぐ国王の命で，ラウルはイギリスのチャールズ二世の宮廷に特使として派遣されることになるのである。事の次第をまったく知らぬ子爵は，理由の分からぬ胸騒ぎを抱えドーヴァーのかなたへ旅立っていく。樫の木のしたでの事件を知った王弟妃は，とるに足りぬと思っていた侍女への国王の関心を感じ，嫉妬に駆られる。ギーシュからは熱い想いを告げられ，また彼からラ・ヴァリエールは自分の親友ラウルの許嫁であり，彼女の心変わりは考えられないと諭されるが，それでも気持ちの済まない彼女は，夜会の席で国王とサン・テーニャンをまえに，侍女たちを言いくるめ，木のしたでの告白が，彼らが聞いていたことを知ったうえでの戯れであったと言わせ，国王に恥をかかせる。だが，憤然として自室に戻ってきたルイに，ルイーズは

面会を求め，自らの思いはけっして偽りではなかったと明言する。そしてこれを機に，二人の仲はさらに親密の度を増していくことになるのである。

さてこうして宮廷の恋愛模様が目まぐるしく変転していたフォンテーヌブローで，同時に，目立たぬだが重要な事態が進展していた。ある宿屋に，ヨーロッパの各地からわけありげな多様な人物たちが集まってくる。そして最後に，病魔に侵され瀕死の状態の老人が担ぎ込まれる。だがこの老人，胸のうえで十字を切る独特なしぐさや紋章の刻まれた黄金の指輪を示すと，宿屋の主人も駆け付けた医者も，たちどころに王公に接するような慇懃な対応を見せ始める。じつは彼こそ，その富とヨーロッパの政治を裏で操るとされる隠然たる勢力により，並みの国王を上回る実権を握っているとされるイエズス会の管区長だったのだ。そしてこの宿屋で，各国から集まった教団関係者が欧州政治を揺るがす機密を持ち込み，そのなかでもっとも重要な秘密をもたらした者に，次期管区長の地位を譲ろうというのである（！）。老人は病魔をおして，つぎつぎと候補者の話を聞いていくが，その最後に現れたのが，なんとつい先ほどフォンテーヌブロー宮の国王の宴に財務卿フーケと連れ立って顔を見せていた，アラミスことデルプレー猊下であった。彼は管区長に，暗号で書かれたフランス王妃に関わるらしいある機密文書を示す。すると老人は，その秘密のあまりの重大さに驚愕し，アラミスを後継者にすることをただちに決め，指輪を彼に贈与したのち永遠の旅路へと発っていく。じつはアラミスは，それ以前から，バスチーユ牢獄にたびたび出入りし，獄長の弱みを握るとともに，そこに収監されている王公並みの特別扱いを受けるある奇妙な囚人の情報を集めていた。彼が前管区長に告げたのは，まさにそれに関係した事柄であり，そのフランス王室を根底から揺るがす最重要機密を，富と権力を手に入れたアラミスはいよいよ利用しようとし始める。彼は盟友フーケに――財政不如意にもかかわらず――自らのヴォーの宮殿で，国王を招いた世紀の大宴会を開くことを勧める。かの有名な「鉄仮面」の挿話が，いよいよ動き出す。

さてダルタニャンはと言えば，アラミスの陰謀に探りを入れようと，相手の不意を衝くため，本陣であるパリのフーケ邸を唐突に訪ねる。だがそこにいたのは，退屈を持て余しているポルトスことデュ・ヴァロン男爵だけであった。銃士隊長は旧友を誘って，かつての従僕でいまや食料品店の店主に成り上がったプランシェが，（これまた）フォンテーヌブローに所有しているささやかな別荘に赴き，店主が囲っている女性とともに，親密な一夜を過ごす。さらに翌日には，フォンテーヌブロー宮にポルトスを伴って顔を出し，アラミスを唖然とさせるとともに（冷静なヴァンヌの司教は，それでも尻尾を出さなかったが），男爵をベル・イル要塞の設計者としてルイ一四世に紹介し，ふたりして国王の夜会に招かれる。その席でポルトスは超人的な健啖ぶりを発揮し，同じく健啖家のルイ一四世と大いに盛り上がる。こうした一連の場面は，物語としての機能はあまり持たないが，我々読者に，巨人ポルトスの健啖（と，デュマの美食の知識）を見る最後の機会を与えてくれるとともに，シリアスな恋愛譚と陰謀譚に挟まれたなコミック・リリーフとなっている。

恋愛絵巻に話は戻り，フォンテーヌブロー宮では，またひとつの嵐が起ころうとしていた。バッキンガム公との死闘の傷がやっと癒えたワルド伯爵が，宮廷に帰還したのである。狷介でトラブルメーカーの彼は，ギーシュ伯爵の面前で，王弟妃と伯爵自身，さらには国王とラ・ヴァリエールの仲に関しあてつけを言う。自らの恋だけでなく，友人であるラウルの婚約者にたいする侮辱を受けたギーシュは，そくざにワルドに決闘を挑む。ワルドの傷が完全には癒えていないことを考慮し，短銃を使って行われた決闘は，ギーシュが重傷を負う結果になる。伯爵の負傷の知らせ知ったルイ一四世は，すぐダルタニャンに真相を調査させ，銃士隊長は状況証拠から決闘の真実を克明に再現して見せる。だが，決闘に王弟妃とギーシュの恋のみならず，自らの不倫が関わっているらしいことに気づいた王は，伯爵がイノシシ狩りで負傷したという，負傷者の側近マニカンの言い訳のほうを採用する。ギーシュが死に瀕していることを知ったアンリエットは，お忍びで彼の病室を訪れ，悔悟の涙を流す。それに気づいた伯爵も，自らの行為が無駄ではなかったことを知り，死の危険に満ちた夜を乗り切ることに成

功する。

宮廷は長かった離宮滞在を終え，パリに帰還する。だが王とラ・ヴァリエールの仲睦まじさを目の当たりにした王弟妃は，またもや嫉妬に駆られ，王太后アンヌと王妃マリー＝テレーズにたいし，今回の決闘事件はルイーズが原因であることを明かし，彼女を宮廷から追放することを提案する。それを受けた太后は侍女にたいし，領地に帰り，婚約者と結婚するよう迫る。絶望し涙にくれるルイーズだが，それを見たルイが原因を尋ねても，気の弱い彼女は答えようとしない。気の立った王は，彼女の部屋にラウルの肖像が飾られているのを見て，婚約者にたいする後悔の念が原因であると誤解し，部屋を飛び出していく。恋人からの慰めの言葉を一晩むなしく待ちわびたルイーズは意を決し，カルメル会修道院で出家するため，朝まだき，ろくに道も知らぬパリの街に足を踏み出す。そこにたまたま夜間の勤めを終えたダルタニャンが通りかかり，彼女を修道院へと送り届ける。そのころルイはルイーズの姿が見えないことに不安に駆られ，周囲に探させるが誰も行方を知らない。そんななか銃士隊長が王に，彼しか知らない事の次第を耳打ちする。ルイはそくざに修道院の重い門をこじ開け，恋人を連れ帰る。こうした恋の試練を経て，国王は宮廷のあらゆる妨害に対抗して，寵姫との恋を貫徹することを心に誓う。アンリエットのもとに駆けつけたルイは，涙ながらに，ルイーズを侍女として彼女のもとに置き続ける約束を取りつけるのだった。

だが王弟妃は，国王と自らの侍女に会う機会をなかなか与えようとしない。そんななか名案を出したのは，モンタレーの恋人にして相棒で，いまや王弟付き侍従に収まっているマリコルヌであった。彼は，ルイーズのルーヴル宮での居室がギーシュ伯爵の居室のうえにあたっていることに着目し，怪我で臥せっている伯爵に了解をとり，彼の部屋とルイの寵臣サン・テーニャンの部屋を交換させ，そこに秘密の階段を作らせて，ルイーズの部屋と通じるようにする。そして国王とその恋人は，めでたくサン・テーニャンの居室で逢引を楽しめるようになる。最初はぎこちなかったふたりだが，しだいに気持ちが高まり，ついに熱い抱擁を交わすところまで来る。ところが，まさにそのとき（！），イギリスにいたはずのラウルが婚約者の部屋に入ってくる。許嫁の私室に国王の姿を垣間見た子爵は，苦悩の叫びとともに部屋を飛び出していく。ラウルは彼の恋の危機を知らせる王弟妃からの手紙で，急きょイギリスから帰国していたのであった。

子爵はその後すぐ，王弟妃から国王と婚約者の恋の顛末を聞く。彼は（国王に刃向うわけにはいかないので）サン・テーニャンに決闘状を送り，ポルトスにその仲介と介添えを頼む（決闘状を届けに行ったポルトスと国王の寵臣のあいだに珍妙なやり取りが交わされ，またしても巨人はシリアスな展開に一服の弛緩の時を提供する）。決闘のことを聞いたルイ一四世はそれを禁じるが，そこにアトスことラ・フェール伯爵が面会を求めてくる。すべてを息子から聞いた父は，いまいちどラウルとルイーズを娶わせる承諾を国王に求め，それが拒否されると，ルイがラウルをイギリスに派遣しそのあいだに婚約者を奪った不実を糾弾したうえ，これまでひたすら王家のために尽くしてきた過去を呪い，自らの剣を折って退出する。国王はすぐさま銃士隊長を呼び，伯爵の逮捕を命じる。さてそのころ，自宅で苦悩の時を過ごしていたラウルのもとに，ルイーズが訪ねて来，自身の心の軌跡をすべて打ち明けたあと，ひたすら許しを請う。男はすべてを受け入れ，永遠の別れを告げる。女はその場で気を失う……

ダルタニャンはアトスをバスチーユ監獄に連れて行くが，逮捕というかたちはとらず，伯爵に，たまたま居合わせたアラミスと監獄長のベーズモー（ヴァンヌの司教は，例の件で獄長に会いに来ていたわけだが）とともに食事をさせておき，自らはルーヴルに取って返し，国王に逮捕の不正を質したうえで，自分もまた旧友とともにバスチーユに捕囚してくれるように言う。銃士隊長の言葉の正しさと国王としての面目のあいだに挟まれ，怒りに我を忘れたルイは，ダルタニャンが机上に置いた剣を突き返す。自らの命とも思う剣が，床のうえに転がるのを見た隊長は，怒り心頭に発し，その剣で自らの胸を突こうとするが，一瞬早く国王に制止される。そしてルイはその後すぐ，アトスの釈放を命

じる書類に署名する。バスチーユに取って返したダルタニャンは，アトスを馬車に乗せ，パリを出る城門を目指す。そこに，父が捕われたという噂を聞いたラウルが，ポルトスとともにアトスを奪還すべく，馬車のあとを追跡してくる。こうしてたまさかの再会を果たした三人のかつての銃士のそのひとりの息子は，パリの城門で別れの挨拶を交わす。ラ・フェール伯爵とその息子の子爵は，苦しい思いに満ちたパリをあとにし，ブロワの領地に戻ることにしたのであった……

さて同じころ，パリのとある部屋で，初老の男女が向かい合っていた。ひとりはヴァンヌの司教であり，もうひとりはなんと，ラウルの母親であり，かつてはアラミス自身の恋人でもあったシュヴルーズ夫人である。夫人は，その昔は王太后アンヌの側近であり，権謀術策で鳴らしたのだが，フロンドの乱のさい反乱者側に回ったため宮廷から疎まれ，現在では亡命者のような境遇に墜ちており，死亡説まで流れていたのであった。その夫人が，金銭的不如意を立て直すため，フーケの公金横領の事実を示す前宰相マザランの受領証を手に入れ，それをアラミスを通じて財務卿自身に高く売りつけようという算段なのである。手紙の信憑性に疑いを持ち，また高等法院長という肩書を持つフーケにとってそれがさほどの危険性を持たないと判断したアラミスは，かつての恋人の申し出をすげなく断る。それが，三十年まえには激しく愛し合っていた二人の仲の，なれの果ての姿であった。夫人は手紙を，今度はフーケの政敵コルベールに売ろうとする。財務官はそれを，しかるべき金と夫人が王太后に謁見する手はずを整える約束によって買い取る。というのもコルベールは，金に困ったフーケが高等法院長の職を売りに出そうとしているという情報を得ており，それが実現した場合，手紙がフーケ追い落としにおいて決定的な意味を持つかもしれないと読んだのだ。さてシュヴルーズ夫人は，ベルギーの修道女の変装のもと，王太后の病を癒す秘薬を献上するためというふれこみで御前に参上する。そして唐突に，病の原因として，アンヌが心に秘めた，二三の者しか知らない国家の一大秘密を語り始める。それは，太后がルイ一四世を生んだとき，じつは双子の兄弟が産み落とされていたという驚愕すべき事柄であり，そのさい宰相リシュリューの計らいで，国家の安定のため，あとから生まれた子の存在は闇に葬られ，隠して育てられたというのだ。秘密を暴き立てられた王太后は怒りに震え，尼に正体を明かすよう迫る。と，ヴェールの陰から現れたのは，かつてリシュリューに迫害されていたさい，ともに耐え闘った旧友の顔であった。ふたりの老いた女は，懐かしさに抱き合って涙をこぼす。フロンド時代の恩讐は忘れられ，アンヌは友人に友情と金銭的援助を約する。ふたりはさらに，隠された王家の子息のその後を語り合う。母はその子が間もなく死んだと知らされていたのだが，その友人によれば，子はじつは生きているという噂を聞いたことがあるという……さてフーケはと言えば，彼は実際金を必要としており，高等法院長の職を売ろうとしていた。というのも，ベリエール夫人と熱烈な恋に落ちていた彼は，かつて国王からの度重なる要求により経済的窮地に立たされたとき，夫人が自らのすべての宝飾類を売りに出して彼を支えようとしたことを知り，それを買い戻すための金が必要だったのだ。フーケは，ヴァネルという高等法院の高官に職を売ることにする（じつはその男，コルベールに説得されて，やっとその大きな買い物をすることに同意したのだが）。アラミスがフーケの屋敷に着いたとき，財務卿はすでにヴァネルに職を売ることを確約していた。デルプレー猊下はフーケに，シュヴルーズ夫人が見せたマザランの受領証が盗まれていないか，確かめるよう言う。それはあんのじょう，財務卿の書類入れから消え去っていた。だが，高等法院長でありあらゆる裁判を指揮する立場にあるフーケが，訴追されることなど起こりえないだろう，とアラミスは言う。だが，職はすでに売られてしまっていたのだ。ふたりの血相が変わる。アラミスはいよいよ，最後の大勝負に出るしか道は残されていないことを悟る。

アラミスは，バスチーユ監獄の長ベーズモーがイエズス会に属する秘密結社員で，教団の上級者に服従の義務があることを利用し，懺悔聴聞僧として例の特別待遇の囚人に面会を果たす。そのまだ年若い囚人は，自分が幼児のころから家庭教師役の貴族と乳母に大切に育てられていたのだが，ある偶然から貴族のところに来た手紙を読み，そこに王太后アンヌと宰相マザランの名が書かれていたのを

発見したこと，そしてその後すぐ，ふたりの育ての親から引き離され，バスチーユに収監されたことを語る。それにたいしデルプレーは，シュヴルーズ夫人とアンヌの会話にも出ていた，国王ルイ一四世に双子の兄弟がいたという秘密を明かし，自分がいま話しかけている囚人こそがその闇に葬られた王子に他ならないことを，ルイ王の肖像と手鏡を示しながら彼に教える。さらにヴァンヌの司教は闇の王子に，自らの手引きで，いまこそ牢を脱出し，現国王に代わってフランスの王位に就くべきだという，驚天動地の提案をする。初めは事のあまりに意外さに戸惑い，躊躇していたフィリップ（それが王子の名であった）だが，自らを闇のなかに放逐し，地上の権力と快楽を独占している兄弟にたいする憤怒の情に駆られ，計画に乗ることを誓うのだった……それから数日ののち，脱出作戦が決行される。アラミスは，あらかじめ特別恩赦でひとりの囚人が釈放されるよう手はずを整えておき，自分とベーズモーが晩餐をとっているときに恩赦状が届けられると，獄長が目を離したさいに，それを別の書類にすり替える。ベーズモーは，書類を見直すと対象者の名が変わっており，それがことあろう，厳重な監視を要求されている例の特別待遇囚人であることに驚愕し，大臣に問い合わせるという。だが，ここでヴァンヌの司教は，自らがイエズス会の最高指導者であることを明かし，平身低頭する獄長を促して，囚人を出獄させ馬車に乗せてパリ近郊の森のなかに連れ去る。生まれて初めて大自然のなか自由を味わうフィリップにたいし，アラミスは，このまま自然の懐で誰にも知られることなく質素に暮らすことと，危険を冒してフランス王位への階梯を上ることの選択を迫る。しばしののち，闇の王子が選択したのは後者の道であった。ふたりは，あらかじめ手渡されていた宮廷の重要人物たちにたいする知識を確認したのち，フィリップが王位に就いた暁には――リシュリューやマザラン同様――アラミスをまず枢機卿になし，その後宰相に任じて，フランスという強国と，ヨーロッパ政治を陰で操るイエズス会の共同のもと，史上かつてない権力をともに作り上げることを誓う。

さてヴォーではいよいよ，フーケが贅を尽くして作らせた自らの宮殿と庭園にルイ一四世を招き，史上語り継がれる大宴会を催そうとしていた。だがつぎつぎと豪華を極めた饗宴が続くうち，国王の顔はしだいに愁いを帯びてくる。ルイは自らを上回る財務卿の富を見せつけられ，忸怩たる思いを抑えられなかったのである。そんな王の気持ちを見透かしたコルベールは，この時とばかり例のフーケの公金横領を示す受領証を見せる。さらには，かつてフォンテーヌブローで掠め取ったフーケのラ・ヴァリエール宛の恋文（それは，今後寵姫が王にたいする影響力を増すことを見越したヴァンヌの司教が，財務卿を促して書かせたごく形式的なものにすぎなかったのだが）をルイに発見させ，嫉妬心を爆発させる。ヴォーの宮殿での夜，客室に引き上げた国王は銃士隊長を呼び，フーケ逮捕の命を出す。だがダルタニャンは，フーケは身代をつぶす覚悟をもって国王をもてなしているのに，まさにその饗応の席で館の主人を逮捕することに異議を立てる。王は翌朝まで逮捕を伸ばし，その代わり隊長に財務卿を一晩中監視するよう申し付ける。

さて，その晩ルイ一四世が眠りにつくと，急に寝台が沈んでゆき，地下室にいたふたりの男が彼を拉致する。その中背と大柄の仮面をつけた男たちは，長い地下道を通って戸外へ王を連れ出すと，用意されていた馬車に彼を乗せ，一路パリのバスチーユ監獄へと向かう。男たちは言うまでもなくアラミスとポルトスであり，元銃士たちはヴォーの館にしつらえられた非常逃亡用の装置を利用し，まんまと国王を誘拐したのであった。バスチーユに着くとヴァンヌの司教は監獄長に，以前特別待遇の囚人を釈放したのはやはり誤りだったと分かり，ふたたび収監させるために連れ戻したと告げる。さらにこの囚人は頭がおかしく，自分が国王だと騒ぎ立てるだろうが，いっさい話を聞く必要はないと付け加える。こうしてアラミスは見事数時間のうちに，国王と囚人という立場にあった双生児の，光と闇を入れ替えることに成功したのである。

夜が明けるころヴォーでは，ダルタニャンの監視のもと（だが銃士隊長は，財務卿の人柄と境遇に深く共感しており，監視はごく形式的なものであった）不安な一夜を過ごしたフーケが，隊長にアラミスを探してきてくれるよう頼む。ところが銃士隊長は，なんとヴァンヌの司教が国王の寝室から出

てくるのを見出す。さらに驚くべきことには，デルプレーは国王がフーケの解放を決定したことを告げ，寝台からの王（じつはフィリップ）の声がそれを肯定する。ダルタニャンは，これまでほとんど親交のなかった王と司教が急接近したことに驚愕するが，アラミスがフーケの処遇に関し王をなんらかのかたちで説得したのだと思い，旧友の相変わらずの策士ぶりに脱帽する。さて司教は財務卿と会い，これまで同盟者にもいっさい打ち明けていなかった陰謀のすべてを明らかにする。ところがフーケの反応は，まったくアラミスの意想外のものであった。館の主人は，国王が自らの破滅を図っていたにもかかわらず，饗応していた高貴の客人にたいし大逆の陰謀が行われたことに激怒し，アラミスと共犯のポルトスを即刻追放することを宣告したのである（だが，それでも友人を想うことを忘れないフーケは，追放者に四時間の猶予を与え，彼らが自らの掌中にあるベル・イル島に落ち延びることを可能にする）。ヴァンヌの司教は，国王のすり替えという奇跡的難事を成し遂げながらも，最大の味方によって計画を根底から覆されたことに呆然としながらも，訳が分からず寝ぼけ眼のデュ・ヴァロン男爵を叩き起こし，一路ブルターニュへと馬を駆る。フーケはと言えば，逆方向バスチーユへと駆けつけ，獄長の執拗な抵抗を突破して，狂乱状態にあったルイを救出する。財務卿は王に，今回の陰謀が自分とはまったく関わりのないところで計画されたものであったことを言明し，陰謀の首謀者にたいしても恩赦を願い出る。だが怒りの極にあった国王が，それに耳を貸すはずもなかった。ふたりの元銃士にたいし，即刻の逮捕と死罪が宣告されたのである。

そのころヴォーでは，フィリップがルイの代わりに朝の御前会議を始めようとしていた。偽の国王はアラミスの念入りな教育に従い，巧みな演技で王公たちとの最初の会見をこなしていくが，さすがに自分を見捨てた母であるアンヌとの出会いには内心の動揺を抑えられず，その態度は愛と憎しみの念が交錯するものとなった。会議が終わり，フィリップがダルタニャンに，なぜか姿の見えないヴァンヌの司教を探してきてくれと頼んでいたとき，突然扉が荒々しく開き，ルイがフーケを従えて姿を見せる。寸分たがわぬ容姿のふたりが面と向かい，周囲は驚愕のうちに凝固する。ひとりだけ事の次第を了解している財務卿の心に，アラミスの計画の完璧さと，自らそれを壊してしまったことへの後悔の念が浮かぶ。しばしののち，ふたりの王は互いに自分こそが本物だと言い張るが，誰も判断を下すことができない。だがルイがダルタニャンに向かい，もうひとりの逮捕を命じたとき，銃士隊長の心に直感が働き，彼はフィリップを逮捕する。自らが生んだ双生児の片割れが生きているというシュヴルーズ夫人の言葉を思い出したであろう王太后は，その子がふたたび牢獄への道を辿ることになるのを見て，くずおれ身動きもできない。その母に慰めの言葉をかけるフィリップの姿には，王公だけが持つ崇高さが表れていた。それにたいし，ルイの対応は現実的かつ苛酷なものであった。彼はダルタニャンに，弟を南仏の島に幽閉するため護送することを，ただちに命じたのである。

さてアラミスとポルトスは，ベル・イルへ落ち延びる途上，ブロワのアトスの屋敷に立ち寄る。ヴァンヌの司教はラ・フェール伯爵に，自分たちが大逆罪を犯し，いまや追われる身であることを告白し（ただし，ポルトスだけはいまだに事の真相を知らず，勲功のため王によって公爵に任じられることを夢見ているのだが），永久の別れを告げる。彼らが去ったすぐあと，伯爵邸に新たな珍客が現れる。それは，『二十年後』でフロンドの猛将として描かれたボーフォール公爵であった。彼は，ルイ一四世のもと表立った戦乱の失せたフランスをあとにし，北アフリカに渡り，その地を平定しようという勇壮な計画を語る。それを聞いたラウルは，自分もぜひその計画に参加したい旨申し出，公爵は彼を自らの副官として採用する。父は，息子が消え去ることのない恋の痛手を抱え異国の地で玉砕することを望んでいるのではないかといぶかるが，決心が固いことを知り，ともにパリと南仏へ出発の準備を兼ねて旅立つことにする。パリに着いた親子はダルタニャンを探すが，（隊長がその店に寄宿している）プランシェによれば，彼は秘密の任務のため長期の旅行に旅立ったとのこと。だが，銃士隊長が残していった地図から彼が地中海方面に向かったと推測した父子は，そのまま旅を続行する。彼らはアンチーヴまで来て，ダルタニャンの足跡を見失うが，ある漁師から，数日まえある貴族から強引

にサント・マルグリット島へ船を出させられたこと，彼は大きな馬車の車体を運んでおり，そのなかから黒い兜と黒覆面で顔を隠した亡霊のような男が姿を現したことを聞く。その貴族がダルタニャンであることを確信した親子は，その要塞島に渡る。彼らが塞の近くに来たとき，突然ひとつの鉄製の皿が飛んでき，そこには「我はフランス国王の兄弟なり」と刻まれていた。彼らがその文字を読むやいなや，要塞から激しい銃撃が始まる。彼らが応戦しようとしたとき，要塞から銃撃を制しダルタニャンが駆けつけてくる。銃士隊長は要塞司令官を，アトスらがスペインの軍人でまったくフランス語が解せないと言いくるめ，彼らの身柄を保護する。そしてひそかに，フランス王室に生じた忌まわしい秘密を明かす……さらには，ルイ一四世の双子の兄弟が，この絶海の孤島で黒い鉄の仮面をかぶり一生を終えることを余儀なくされることを……その後すぐ，隊長のもとに，ルイ一四世からのパリ帰還の命令書が届く。アトス父子とダルタニャンは，海を渡ったとあるフランスの港町で別れを告げる。だが，訳の分からぬ胸騒ぎのした銃士隊長は，いったん別れたあと引き返し，いま一度親子を抱きしめる。隊長の予感は正しかった。彼ら三人にとっても，これが今生の別れとなってしまうのである。大軍の出発準備に沸き返り，生と死の香りが入り混じるマルセイユの都市に，親子は悄然と到着する。いよいよ明日は出発だという日の晩，アトスはラウルと一晩中語り明かし，かならずや生還して，父にふたたび顔を見せてくれることを約させる。父が子の乗船を見送ろうとしていると，老僕のグリモーが駆けつけ，ラウルを見守るため，老骨に鞭打ち，灼熱の地に渡る決心を語る。たったひとり桟橋に残された元銃士は，息子を乗せた船が水平線に消えゆくまでひたすら見送り続けいていた。

ルイ一四世がダルタニャンをパリに呼び戻したのは，ブルターニュ地方の都市ナントで三部会を開催するので，その警護に随行を求めるためであった。だが銃士隊長は，そこにきなくさい臭いをかぎつける。おそらく国王は，その地でフーケの逮捕を画策しているのだ――アラミスの陰謀から自分を救ってくれた恩人であるフーケの。財務卿のほうでも，そうした気配を察し，彼の取り巻きは善後策を検討していた。結局，国王の意思に従うよう見せかけナントに向かいながら，危機が訪れればすぐそこから至近距離のベル・イル島に落ち延び，抵抗あるいは逃亡の手段に訴えることにする。そういうわけで，フーケはいの一番に到着し逃亡の手はずを整えようと，水路ブルターニュの古都に急行する。だが，彼の川船をもう一艘の船が影のように追ってきて，ほぼ同時に目的地に到着する。それは，彼の天敵であるコルベールその人であった。宿に入ったフーケをダルタニャンが訪問し，国王が到着すれば，通行権なしではいっさいの者は都市を出られなくなることを告げ，暗に逃亡を勧める。だが財務卿が逃げようとしたまさにそのとき，国王の到着を知らせるラッパの音が響く。ルイとコルベールは，あくまで用意周到にフーケを追い詰めようとしているのだ。そして実際，ナント城での国王と財務卿の会見ののちすぐ，銃士隊長にフーケ逮捕の命令が出される。ダルタニャンがフーケの宿舎に向かおうとしたそのとき，彼はテラスから，市街のそとの平野を白馬の騎手が全速力で海に向かって走っているのを認める。それは，逃亡の最後の機会を捉えた財務卿その人であった。銃士隊長は黒の駿馬にまたがり，それを超人的な速さで追走する。壮絶なデッドヒートののち，彼はついにフーケに追いつくが，そこで黒馬が力尽きて倒れる。ダルタニャンはそれでも白馬を銃で撃ち，走ってフーケをその手で捕えるが，そこで隊長自身も力尽きて倒れてしまう。だが財務卿はそれ以上逃げようとはせず，自ら追手の手に落ちる。馬を失った彼らは，ともに敗者のような足取りで，並んでナントの都市の入り口まで歩いて帰ったのであった。こうしてついに長かったフーケ追い落とし作戦の幕が閉じられ，ルイ一四世という唯一の太陽がフランスの国土のうえに輝くことになる。

そのころ，ベル・イル島に渡ったアラミスとポルトスは，海上封鎖をされ，逃げ場を失って窮地に立たされていた。ヴァンヌの司教はここにおいて初めて，デュ・ヴァロン男爵に，自分たちが大逆罪に問われ，国王軍に追跡されていることを告白する。そこに，フーケ逮捕後すぐルイ一四世によって派遣されたダルタニャンが，国王軍の司令官として島に到着し，彼らに会見を求める。銃士隊長は，旧友たちを船で護送させ隙を見つけて逃がす腹積もりだったのだが，彼の副官は国王からの親書を携

えており，そこにはベル・イル要塞征服と反乱首謀者の銃殺という当初の目的を完遂するまでは，いかなるかたちにおいても謀議を禁じてあった。ダルタニャンはただちに司令官を辞職することを宣言し，船をフランス本土に戻そうとするが，それにたいしてもルイの慧眼は先手を打っており，隊長の辞職後は，ただちに副官がその職を継ぐ指令が添付されていたのである。憤然としたダルタニャンは，旧友たちをあとに残し島を去らざるをえなかった。その後すぐ島にたいする砲撃が始まり，国王軍が港から上陸を始め，戦端が切って落とされるが，アラミスとポルトスの陣頭指揮により，軍隊はあっさりと駆逐される。だがじつは，それは陽動作戦であり，国王軍は島の別の位置から侵入を開始していた。アラミスはフーケの仇を討とうと意気を上げる島民に，無益な殺傷を抑えるために投降を命じ，自らはポルトスとともに，ロクマリアと呼ばれる大洞窟内に小船を用意させ，そこからひそかに島からの脱出を図ろうとする。作戦は順調に進んでいたのだが，たまたま鹿を追ってきた国王の護衛隊士が洞窟に潜入したことから，かつての銃士と護衛隊士のあいだに凄絶な戦闘が開始される（『三銃士』の状況の再現！）。元銃士たちは，洞窟の奥深くの暗闇に護衛士たちをおびき寄せ，そこでポルトスが鉄棒でなぎ倒し，さらには火薬に火を放ち八〇人あまりを殲滅させる。だが，爆裂を逃れようとしたデュ・ヴァロンの足が突然止まり（彼の英傑の父祖たちにも，同様の現象が起きていたのだが），タイタンは崩れてきた巨岩の下敷きになってしまう。アラミスらは必死で，岩から巨人を救い出そうとしたが無駄であった。ポルトスは，彼ら凡人の努力をあざ笑うがごとき「重すぎる！」という言葉を最後に，逝ってしまう。海上に逃れたアラミスは放心し，つねに冷静な彼の眼に生まれて初めて涙が伝う……その彼の船にも，国王軍の追手が迫っていた。ところが，乗り込んできた船長にヴァンヌの司教がある仕草をすると，たちまち士官は慄き始め，司教をフランスへと連行するはずの船はスペインへと針路を変える。イエズス会管区長は，こうして絶体絶命と思われた窮地から奇跡的な生還を遂げるのであった。

さてダルタニャンはと言えば，怒りに燃えてナントのルイ一四世のもとに戻り，銃士隊長の存在をなおざりにするような今回の王のやり方にたいし，憤懣をぶちまける。だがそれにたいしルイは，まったく動じることなく平然と，国王の絶対意思と臣下の絶対服従義務を説く。これにはさしもの歴戦の勇士も，時代の変化を感じざるをえなかった。彼のまえにいるのは，智謀においても自分に引けを取ることのない，正真正銘の絶対君主の姿であったのである。そして王は同時に，優秀な臣下を評価しそれにたいし恩賞を与えることも忘れない。彼は銃士隊長に，近々起こるであろう対外戦争において勲功をあげた暁には元帥杖を与えること，また大逆罪に問われていた彼のふたりの友人に恩赦を与えることを約す。だが数日後，ダルタニャンはアラミスの手紙により，ポルトスの死を知ることになる（彼は国王に報告に行くが，王はすでに緻密な情報網によりすでにそれを知悉していた）。銃士隊長はピエールフォンに赴き，男爵の盛大な葬儀に参列する。そして巨人が遺書で，かつての銃士仲間にそれぞれやさしい配慮を行い，またその膨大な遺産を彼ら四銃士の共通の息子といってもよい存在であるラウルにすべて移譲したことを知り，涙を流す。またダルタニャンは，長年男爵と喜びと苦難をともにしてきた召使いムスクトンが，主人を失った悲しみのあまり，遺産として譲り受けた豪華な衣装の山（巨人の従僕は晩年の満ち足りた生活のなかで，主人の衣装が合うくらい肥え太っていた）のなかで息を引き取っているのを見出す。

その頃，領地に戻ったアトスはほとんど食事もせず，ひたすらラウルの安否を想う日々を送っていた。彼は，ほとんど息子と一心同体化した神秘的な夢幻境のなかで，ラウルがポルトスの死を告げるのを聞くが，さらにある日，アフリカの灼熱の大地に無数の死体が転がっている光景を，ついで息子がしだいに天へと遠ざかっていく光景を幻視する。アトスがその白昼夢から覚めたすぐあと，アフリカにラウルと同行した従僕のグリモーが帰ってきて，主人に息子の戦死を知らせる。すでに夢幻の境地のなかで子爵に精神的合一を果たしていたラ・フェール伯爵は，それを聞いて安らかに天へと召されていく。その後すぐ，ポルトスの葬儀のあとその報告のため伯爵邸に立ち寄ったダルタニャンは，

今度はアトスが亡くなっているのを見出すことになる。最大の友人の死に接し，呆然自失する銃士隊長だが，グリモーがもたらしたボーフォール公の秘書からの手紙で，ラウルの最期の様子を知ることになる。子爵は，自軍がアラビア軍の急襲によって窮地に陥ったところを，たったひとりで馬を駆り敵に向かって突進し，その勇気によって味方の奮起を促し，大勝利に貢献したのであった。彼は銃弾により全身に傷を負っていたが，その頑健な身体により命をつないでおり，医者の診断でも治る公算が強い状態であった。ところがその少しあと，ラウルは寝台から落ちて失血死しているのが発見された。おそらく彼は，この期に及んで生きながらえる理由を見出さなかったのであろう，と手紙は結んでいた。ラ・フェールの領主とその息子の合同葬儀が行われたあと，ダルタニャンは，誰もいなくなった墓にひとりの女が参っているのを見出す。それは，言うまでもなくラ・ヴァリエール嬢であった。銃士隊長は，ラウルの限りなく自殺に近い死を，国王の寵姫に伝える。女は，自分のこれからの一生がつねに悔悟に付きまとわれるであろうこと，間もなく人生から罰を受けるであろうことも分かっているが，それでもいま少し，自分が狂ったように愛している男のそばにいることを許してほしいと言い残し，サン・テーニャンとともに立ち去る。自分が愛したほとんどの者が逝ってしまい，その場にたったひとり残されたダルタニャンは，人生の無常を噛みしめる。だが，それでも神が自分を召される日まで人生をまえにと進むことを心に誓い，ふたたび任務へと戻っていくのだった……

エピローグ――それから数年後，ロワール地方の平原でルイ一四世が狩りを楽しんでいるところに，しばらく宮廷を離れていたダルタニャンが伺候する。銃士隊長は，国王が目も覚めるような美女と親密な様子で戯れているのを見出す。そしてラ・ヴァリエールが，少し離れたところで退屈を囲っているのを。美女はかつてルイーズの同僚であったトネー・シャラント嬢，現在のモンテスパン侯爵夫人であり，国王の寵は確実に変化しつつあったのである。ダルタニャンは狩場でコルベールから，スペインからの客人を紹介される。アラメダ公爵という名のその老人は，なんとアラミスその人であった。その夜の宴の席で，コルベールやアラミスと並んで席を占めたダルタニャンは，オランダとの戦争が近いこと，そのためフランスはイギリスと同盟を結び，スペインとは不干渉条約を結ぶ必要があることを知る。アラメダ公爵がそこにいたのは，スペインの言質をとるためであった。ルイ一四世は，恋人のギーシュを追放され不幸を囲っている王弟妃をつかまえ，イギリスに兄チャールズ二世を訪ね（女好きの国王のため，美女を同行して），対オランダ同盟を結ぶよう持ちかけることを依頼する。コルベールはと言えば，ダルタニャンの知らぬ間に，オランダやイギリスにも引けを取らない海軍をフランスに作り上げていた。このようにして国王と財務卿は，着々とヨーロッパの覇権への道を登り詰めようとしていたのである。コルベールはダルタニャンに，陸軍の指揮を執ってくれるよう依頼する。銃士隊長は巧みに，その成功の暁には元帥の地位に就けるよう要求する。

その夜計られた事柄はことごとく実現され，次の年の春，フランスはオランダにたいし開戦する。ダルタニャンに率いられたフランス陸軍はオランダの塞をつぎつぎと攻略し，国土の奥深くまで進軍する。そんなある日，司令官のもとに，国王と財務卿から黒檀の豪華な小箱が届けられる。そのときダルタニャンは，敵の執拗な抵抗を受け苦戦の最中であったが，ようやく戦況の好転が見極められ，小箱に手を触れようとしたまさにそのとき，敵の銃弾が小箱を砕きダルタニャンの胸を貫く。彼は箱から転がり落ちた百合の紋章の付いた元帥杖を握りしめ，駆け寄った部下たちにはさだかには聞き取れなかった言葉を残して逝く。その言葉は，かつての僚友の三銃士に向けられた最後の挨拶であった。

歴史にのみ込まれる主人公たち

『ブラジュロンヌ子爵』の後半部は，宮廷恋愛絵巻とルイ一四世による政治的ヘゲモニーの確立という，ふたつの大きな筋から構成されていると考えられる。前者は，当初王弟妃の華やかな魅力に眩

惑されていた国王が，しだいに可憐なラ・ヴァリエールに心惹かれていき，宮廷内の様々な障害を乗り越え恋を成就させていく過程であり（エピローグでは，ルイの心がモンテスパン夫人に移っていく瞬間が捉えられているが），そこに国王の寵姫となった許嫁にたいするラウルの報われない愛と，その結果としての壮絶なかぎりなく自死に近い死という展開が絡む。こうしたルイ一四世の恋愛の軌跡は，ほぼ事実に沿って描かれており，そこにラウルとの葛藤という虚構が介入するわけだが，前章でもすでに言ったように，国王とラ・ヴァリエール，そしてブラジュロンヌという貴族のあいだの感情的関係にも，いくつかの資料的裏付けがあるのであった。権力闘争に関しても，ルイがヴォーの宴会のあまりの華麗さによって嫉妬心を高じさせ，それがナントでの公金横領を名目としたフーケの逮捕へとつながっていく過程は，歴史的な流れに基づいている。またその逮捕にあたったのが，ほかならぬ銃士隊長ダルタニャンであった（！）ことも事実である（１）。

よってここでも，歴史に虚構的主人公たちのドラマがはめ込まれるという，『二十年後』いらい採用されてきた構造が踏襲されていると言えるのだが，『二十年後』や『ブラジュロンヌ』前半でのイギリス王政復古の挿話におけるような，虚構の登場人物が歴史的事件の内実をほとんど作り変えてしまうほど大活躍するという，いわゆる「歴史異聞」手法がとられているかと言えば，そうは言えない。恋愛絵巻におけるラウルにしても，権力闘争におけるダルタニャンにしても，いずれも受動的副次的な役割を強いられており，実際に物語を推進させているのはルイ一四世という存在であって，主人公たちは歴史的事実のなかにいわばのみ込まれ，輝きを失っているという印象が強いのである。そして，そのことに気づいていたからこそ，作者のデュマは――『三銃士』いらいひさびさに――強烈な印象を残す虚構的物語を導入したのだろう（２）。言うまでもなく，アラミスによって企まれる「鉄仮面」の挿話である。

大いなる虚構の導入――「歴史奇譚」としての鉄仮面

大いなる虚構的物語としての「鉄仮面」。だが，ここにも素材となる歴史的事実は存在した。一七世紀後半から一八世紀初頭にかけて，マルシアリという名のヴェールで顔を覆われた特別待遇の囚人が，フランス各地の監獄を転々としていたのである。そこから，その囚人の正体を巡り様々な憶測が飛ぶことになり，一八世紀にはヴォルテールが多くの場で，それがルイ一四世の兄弟ではなかったかという説をすでに提示している。その後一九世紀ロマン主義時代になっても，ヴィニーやユゴーといった作家たちが，その挿話をもとに詩や戯曲を執筆している（３）。

しかし，その謎の囚人がアラミスの陰謀によって，ヴォーの有名な宴会の夜実際にルイ一四世とすり替えられてしまうという奇想天外な物語を作り上げ，その挿話を世界（大衆）文学史上もっとも有名なもののひとつにしたのは，デュマの功績である。そして私見によれば，この物語をかくも魅力的にしているのは，光と闇に分かたれた双子の王子という設定もさることながら，それに国家権力の暴力・闇と，秘密結社による世界支配の野望という，サブカルチャー的想像力がその後，それこそステレオタイプ化するほど利用してやまないであろう，ふたつのテーマを絡ませたことに起因する。国王夫妻から生まれた双子の王子のうちのひとりが，宰相の冷徹な政治的判断により，人知れず闇に葬られ扶育役によって育てられることになり，その後その事実の一端がその子に知られるところになると，扶育役は無残にも殺され，子供は監獄の闇深く囚われることになる。だがその事実を，まさにヨーロッパの政治世界を転覆させるほどの，隠然たる力を秘めた秘密結社の長が嗅ぎつけ，それを自分たちの野望実現のために利用しようとする。ここにはまさに，イアン・フレミングの007シリーズを経て，アラン・ムーアの『フロム・ヘル』に至る，無数のサブカルチャー的作品が行ってきたふたつのテーマの融合があるのである。デュマの『ブラジュロンヌ子爵』は，こういったテーマ融合の嚆矢である

とは言い切れないが，その伝播にもっとも大きな影響を及ぼした作品のひとつであることは間違いない。こうした「歴史奇譚」とでも呼ぶべきテーマの融合は，「歴史異聞」とともに，銃士三部作のサブカルチャー文化史における存在の巨大さを証明するものであると考えられる。

だが，こうした「鉄仮面」の挿話の，それ自体としての圧倒的魅力にもかかわらず，『ブラジュロンヌ子爵』という作品において，それが真に有効に機能しているかというとやや疑問符が付く。この挿話は，作品中での周到な準備・伏線にもかかわらず，あまりにもあっさりとけりがついてしまう。アラミスによって膨大な時間をかけられた緻密なすり替え作戦は，フーケの歓待の作法という古典的（あるいは，のちに見るようにバロック的？）趣味によって，数時間後にはあえなく転覆されてしまうのだ。『ブラジュロンヌ子爵』という作品における「歴史」の長大な支配に，「虚構」が拮抗するには，いま少しの持続が必要だったのではないだろうか（この点に関係して，ランドール・ウォレス監督，レオナルド・ディカプリオ主演のハリウッド映画『仮面の男』（一九九八年）における，すり替え作戦の「成功」――と，その目的への四人の元銃士たちの「結束」――という結末は，映画としての出来，歴史的感覚の欠如はさておき，鑑賞者への効果という観点からは，一定の評価が与えられてもよいと思われる）。

歴史的主体性の終焉――絶対的権力への憧憬？

『三銃士』において四人の銃士たちは，虚構的物語の領域でながら，時の最高権力者リシュリューとやりあい，その鼻を明かすことで，読者の歴史的主体性の意識を鼓舞していた。『二十年後』と，『ブラジュロンヌ子爵』のイギリス王政復古の挿話においては，彼らは「歴史異聞」という手法のもと，歴史的大事件において大いなる役割を果たしたように描かれ，読者の歴史への参画の意識を謳いあげて（ねつ造して）いた。それが『ブラジュロンヌ子爵』の後半部分では，物語の歴史へののみ込まれを背景に，老いた銃士たちは，絶対君主ルイ一四世への屈服を強いられているように見える。フーケを支持し国王転覆を図ったアラミスとポルトスは，それぞれ亡命と死への道を辿らざるをえず，アトスは，ラ・ヴァリエールを巡る国王との恋愛の戦いに敗れ，死への道を歩んだ息子ラウルのあとを追う。そしてダルタニャンはと言えば，ルイの権力と知力を認め，文字通りその手足となって働くことを決心せざるをえなかった。ポルトスとアラミスを逃がす算段を国王に封じられ，憤然として国王のもとに赴いた銃士隊長は，数年まえとは打って変わった王の風格に圧倒される。

「ダルタニャンは生まれて初めて，呆然として口もきけず，決断をつけかねていた。いまこそ自分にふさわしい好敵手を見出したのである。国王が用いたのは，もはや奸計ではなく，緻密な計算であり，もはや暴力ではなく，実力であり，もはや怒りの発作ではなく，強固な意志であった。もはや虚勢ではなく忠告であった。すでにフーケを打倒し，ダルタニャンの手を借りる必要のなくなったこの若い国王は，銃士隊長のいささか頑固な打算をすっかり混乱させてしまったのである。」

D'Artagnan demeurait étourdi, muet, flottant pour la première fois de sa vie. Il venait de trouver un adversaire digne de lui. Ce n'était plus de la ruse, c'était du calcul ; ce n'était plus de la violence, c'était de la force;ce n'était plus de la colère, c'était de la volonté ; ce n'était plus de la jactance, c'était du conseil. Ce jeune homme, qui avait terrassé Fouquet et qui pouvait se passer de d'Artagnan, dérangeait tous les calculs un peu entetés du mousquetaire. (4)

こうして国王の手足となることを選んだ銃士隊長が，王の意を受けたオランダとの戦争で壮絶な死を

遂げることは必然であったというべきだろう。

このような主人公たちの国王への屈従は，もちろん一七世紀史の文脈においては，ルイ一四世による絶対権力の掌握という事実を映している。デュマは明らかに，個人的感情の面では四人の元銃士やラウルまたフーケに加担し，のちに見るようにその滅びの美学を綿々と謳いあげるわけだが，その反面――次節で見るように――絶対王政による近代的国家の創出という歴史的真実を描くことを怠ってはいないのである。しかし，そこに同時に，デュマの一九世紀中盤の政治的状況への視線を見て取ることも可能だと思われる。『三銃士』や『二十年後』が執筆されたのは，七月王政期であり，『ブラジュロンヌ子爵』の前半部，イギリス王政復古の部分は，まさに二月革命と同時進行的に書かれたと思われる。それにたいし，『ブラジュロンヌ』の後半が書かれたとおぼしき一八四九年後半は，第二共和政下の大統領に選ばれたルイ・ナポレオンと国民議会の対立が表面化し始め，政治的膠着状態が生じてきていた時期であった（５）。デュマは，のちにナポレオンが帝政への移行のためのクーデターを起こす時点では，すでに敵対的態度をとっていたが，この政権の初期においては大統領を支持していたのであり，また二月革命の余波を食った，自らが経営する歴史劇場の経営悪化の原因となった政治的混乱が解消されることを強く望んでいた。ジャンヌ・バムも，『ブラジュロンヌ』で絶対権力を掌握するルイ一四世の姿と，権力への階梯を昇りつつあったルイ・ナポレオンの姿が重なることを指摘しているが（６），デュマもこの時期，強力な権力の誕生と政局の安定を待望する向きがあったのかもしれない（というか，そうした権力を憧憬する社会的感情を，デュマの作家としての直感が掬い取っていたというべきか）のである。

近代的国家の成立

『ブラジュロンヌ子爵』の前半を扱った前章で，我々は，ノルベルト・エリアスが言うような文明化の過程が，銃士三部作の初めの二作でのダルタニャンら武人の大活躍から，第三部での女性や廷臣といった存在の活躍の場の増加という変化のうちに写しとられているのを見た。『ブラジュロンヌ』の後半部分でも，そうして傾向は強まっている。ラ・ヴァリエールを初めとするルイ一四世を巡る女たちの恋愛葛藤がより大きな位置を占め，サン・テーニャン，マニカン，マリコルヌといった廷臣の活躍はときにダルタニャンの影を薄くさせるほどである（その象徴的な例が，ギーシュの怪我を巡り，国王がダルタニャンの決闘説より，マニカンのイノシシ説をとる箇所であろう）。暴力の影は，日常生活からは可能なかぎり遠ざけられる。暴力は，対外戦争など国王の意思に発するもの（ベル・イル島制圧，アルジェリア征服戦争，オランダ戦争）に特化される。それは，暴力の行使が国王の手に独占されることを示している。

近代国家の成立が，暴力と税収入の国家主権による独占にあるなら（７），『ブラジュロンヌ子爵』の後半は，その過程を見事に描き出していると言える。というのも，そこでは国家主権による税収入の独占も，財務卿がフーケからコルベールへと変わることで明確に示されているからだ。フーケにおいては，国家財源と個人財源が不分離の状態にあった（そのために，ルイ一四世の度重なる出費要求はフーケの身代を脅かすことになったのだ）。また彼の支出の大半は，祝宴という快楽的蕩尽に充てられていた。それにたいし，コルベールは，国家の財源を個人から明確に分離し，支出はとりわけ，軍隊の育成といった明確な国家的目的に有効利用される（エピローグで，ダルタニャンは自分の知らぬ間に，ルイとコルベールがオランダやイギリスに負けない海軍を作り上げていたことに驚嘆する）。『ブラジュロンヌ』のエピローグは，暴力と国家財源の運用が国王という主権者によって独占的に決定される，近代国家の成立を鮮やかに描ききっているのだ。

バロック的心性

ドミニック・フェルナンデスは，『ブラジュロンヌ子爵』という作品を，バロックと古典主義の政治美学的対立として描き出している（８）。もちろん，デュマがバロックという美学的概念を知っていたはずはないのだが（バロックの概念がブルクハルトやヴェルフリンによって美学的に確立されるのは，一九世紀後半である），その対立の図式は驚くほど見事に作品を説明する。フェルナンデスは，ポルトスとアラミスのうちに見せびらかしと包み隠しという，ジャン・ルーセ（『フランスバロック期の文学』）が指摘するバロック的態度の典型を見出し，アトスとダルタニャンのうちには，栄光の追求というバロックの究極的目標を見出す。さらにフーケの祝宴志向において，（フィリップ・ボーサン『ヴェルサイユ・オペラ』が指摘するような）富の一瞬の蕩尽というバロック美学が典型的に表れているのを見る。そして作品全体が，コルベールとルイという古典主義的人間による，フーケとダルタニャン（彼らは敵味方に分かれてはいたが，後者による前者の逮捕の場面に見られるとおり，互いに理解しあい惹かれあっていた）というバロック的人間の支配への過程を表していると言うのである。古典主義者の標榜する「国家理由」は，すべてを有効性に結び付ける。そしてバロック人であったデュマ（そのことは，彼の豪快極まりない蕩尽的人生を見れば言うまでもないであろう）は，当然フーケやダルタニャンらに共感し，彼らの挽歌を雄渾に謳いあげているというわけだ。こうしたフェルナンデスの分析は鮮やかであるが，我々が前節で見たように，デュマ（とマケ）が，（古典主義的な）近代的国家の成立を歴史的必然として描き出していることも忘れてはならないだろう。だがここで真に注目すべきなのは，デュマがバロックという概念を知らないままに，一世紀以上のちに研究者たちが立ち上げることになるバロック的心性とでも言えるようなものを，恐ろしく正確に描き出していることである。デュマは，膨大な量の同時代の回想録・日記のような文書を読み続けるうち，見せびらかしや包み隠し，また栄光の追求や蕩尽趣味といった，近代的・古典主義的な人間とは異なるバロック的人間の心性の本質的部分を捉えていた。『三銃士』を扱った章でも，作者が一九世紀とは異なる一七世紀人の習俗（心性）への注目を示していることを指摘したが，こうしたこの時代独特の心性の的確な把握は，文明化の過程や近代的国家成立の表象とともに，デュマの歴史像の意外な（デュマの歴史像はこれまで，明らかに過小評価されてきた）そして真に驚くべき先見性として，ここで大いに強調しておきたい。

滅びの美学

『三銃士』で四人の銃士の鉄の団結と青春の輝きを，『二十年後』では壮年に達した銃士たちの分裂と再結合，また人生の皮肉だが豊かな味わいを描いてきたデュマは，『ブラジュロンヌ子爵』の前半部ですでに，銃士たちが決定的に袂を分かち老年の悲哀に包まれるさまを提示していた。そしてその後半に至り読者は，彼らの滅び・死がまさに連綿と描き出されるのを見ることになる。フーケの逮捕に始まり，ポルトスの凄絶な爆死とアラミスの亡命，ラウルの自死とアトスの息子のあとを追う昇天を経て，最後の場面におけるダルタニャンの壮絶な戦死。また我々は，いくつもの彼らの忘れがたい別れの場面を目にすることになる（９）――南仏でのダルタニャンとアトス＝ラウル父子の別れ（一度出発した銃士隊長が戻ってきて，再度残された者たちと抱き合う名場面！），過剰な生と死の香りが入り混じるマルセイユ港で，ラウルを水平線上の最後の一点になるまで見送るアトス，そしてダルタニャンのポルトスとアトスの葬儀への万感迫る立ち合い。主人公たちをとことん愛している作者（息子のデュマ(デュマ・フィス)は，ポルトスの最期を描き終えた父が涙にくれているのを見たことを語っている）は，彼らの生を最後の瞬間に至るまで描き切ろうとしているかのようである。

ふたたびドミニック・フェルナンデスの卓抜な分析を引かせていただくなら，作者は四人の銃士たちの死をそれぞれ，世界の構成要素である四大に関わらせることで神話化しようとしている。岩に挟みこまれて死ぬポルトスは大地へと還り，アトスは天の息子のあとを追って大気に昇華し，ダルタニャンは銃弾と爆裂の火に焼き尽くされる。そして海の水を辿ってスペインへと逃れたアラミスは，栄光ある死を迎えられないことで，仲間を裏切った罰を受けることになる（10）。いずれにせよ，無時間的な生を生きることの多い冒険小説のヒーローたちのなかにあって，銃士三部作の主人公たちは作者によって，文字通り死に至るまで時間性を生き抜かされている。それが三部作の大きな特徴なのであり，『三銃士』の青春の輝きだけを小説や映画を通じて享受している鑑賞者は，この巨大な作品群の一部しか見ていないことになるのである。

結論に代えて

以上四章にわたり，長大な銃士三部作の内容を要約紹介しながら，とくにそのなかの歴史と虚構の関係に中心をおき，作品を分析してきた。

歴史と虚構の関係は，銃士三部作を通じて大きく変化していると言える。第一作の『三銃士』においては，デュマがクルティル・ド・サンドラスの『ダルタニャン氏の回想録』という偽回想録を発想源としたこともあり，虚構部分と歴史的事実に基づいた部分が入り混じる構成になっており，虚構部分（ダイヤの飾り緒事件，ミレディーとの葛藤）のほうが優勢であると言ってよい。そんななか，歴史的事件であるバッキンガム公の暗殺において，それがじつは，虚構の登場人物であるミレディーが実際の暗殺者である清教徒フェルトンを操って行われたものだったという，「歴史異聞」手法の最初の表れが見られ，そうした手法は連作小説のその後の展開において大きな役割を占めることになる。また，下級貴族である銃士たちが，時の最高権力者リシュリューを相手に堂々とやりあうという内容からは，『三銃士』という作品が，当時歴史小説に要求されていた，国民国家としてのアイデンティティを確保する，人民の歴史の提示というコンセプトに合致したものであったことも理解されたのである。

それが『二十年後』になると，作品全体が，フロンドの乱と清教徒革命という一七世紀において英仏両国を揺るがせた歴史的大事件によって文字通り占有されることになり，虚構の登場人物たちはそのなかにはめ込まれることになる。だが，そうした歴史的背景のなか，虚構の主人公たちは自由奔放に活躍し，それはときに歴史的事件の内実を一変させてしまうほどなのであり，『三銃士』においてはごく部分的で，しかもミレディーという悪役によるものであったため，周辺的な位置に留まっていた「歴史異聞」が，ここでは文字通り全面に押し出されることになる。歴史的大事件にダルタニャンを初めとする主人公たちが関わり，ときにはその流れに決定的な役割を果たすことは，人民の歴史的主体性を称揚する国民史の要求に，より適合的であったことは言うまでもない。

『ブラジュロンヌ子爵』の前半も，第二部と同じく，その大きな流れは歴史的事実に基づいて構成されている。そんななか，前半部の一方の中心を占めるイギリス王政復古の挿話では，スチュアート朝の再興の陰にダルタニャンとアトスの決定的関与があったという典型的な「歴史異聞」手法が用いられ，歴史主体としての人民のコンセプトが最高度に称揚＝捏造される。しかし，フランスでのルイ一四世の財務卿フーケにたいするヘゲモニー獲得のための闘争においては，主体が国王ルイ一四世に移り，そこでダルタニャンは国王の手足となって，フーケの側についたアラミスらと敵対せねばならず，フランスでのもうひとつの主要プロットである宮廷恋愛絵巻でも，ラ・ヴァリエールを巡りルイ一四世の恋敵となるラウルは，国王とその未来の寵姫の熱烈な恋の展開をまえにひたすら受動的立場をとらざるを得ない。このように，フランスでの挿話においては，虚構の主人公たちは歴史を積極的

に変える機会を持つことができず，「歴史異聞」は有効に機能せず，人民の歴史的主体性の主張も後退している印象が強くなる。

第三部の後半では，こうした傾向が決定的なものとなる。ルイ一四世の権力闘争にしても，宮廷恋愛にしても，その流れはほとんど歴史的事実に依拠しており，虚構の登場人物たちはその流れを変えることはない。「歴史異聞」は破たんしており，歴史の虚構にたいする支配は完全なものとなる。そんななか，「鉄仮面」の挿話という強烈な磁力を持った「歴史奇譚」の虚構性が，そうした支配に抵抗するためのように導入されるのだが，そのテーマ的魅力――国家の暴力と秘密結社の世界支配の野望というふたつのテーマの融合――また作品中での伏線の入念さにもかかわらず，実際の事件自体はごくあっさりと回収されてしまうので，歴史の支配という作品構造に影響を及ぼすには至らない。小説はルイ一四世による絶対主義国家の確立を語り，人民の歴史的主体性の主張は完全に後退している。三部作の最期に至り，『三銃士』での虚構の歴史にたいする優位性と人民史的コンセプトは，完全に反転している観があるのである。

こうした『ブラジュロンヌ』における，歴史による虚構の支配＝のみ込み（と，主人公たちの歴史的主体性の減退）は，なぜ生じたのか。それはまずもって，デュマ（とマケ）が，フランス一七世紀に起きた絶対王権成立の物語を，ひじょうに正確に描き出しているからに他ならなかった。銃士三部作においては，王権と貴族階層の権力均衡の変化が見事に描き分けられている。『三銃士』が描く一六二〇年代後半における，宰相リシュリューの中央集権化への努力と貴族たちの反抗の拮抗，『二十年後』の一六四八年から九年にかけての，フロンドの乱における王権と貴族階層の最終的決戦（イギリス清教徒革命では，決戦は貴族側の勝利に終わるわけだが）を経て，『ブラジュロンヌ子爵』での一六六〇年代初頭における，国王ルイ一四世が財務卿フーケを駆逐することでついに絶対的権力を掌中にするまでの流れが，貴族である主人公たち四銃士の青春から老年・死までの人生の流れと呼応しながら，鮮やかに表現されているのだ。こうしたデュマの一七世紀の三十数年間に渡るフランス政治史の大きな変遷の描写は，的確というほかない。しかもそこには，すでに指摘してきたように，単なる表層的政治史だけでなく，王権の伸長に伴って生じた，武人に代わって廷臣や女性が中心となる習俗の文明化の過程，見せびらかしと隠蔽また栄光の追求や富の一瞬の蕩尽にその精髄を持つバロック的心性から，なによりも現実的有効性を重視する古典主義的心性への移行，さらには国家主権者である国王による暴力と税収入の独占など，二〇世紀以降の社会史や文化史が近代成立の本質的要素として発見していくであろう事柄が，まことに驚くべき先見性をもって表現されており，以上のような「銃士三部作」におけるデュマの歴史像の卓越性は，これまでの彼の正統的文学史・歴史小説史における評価の低さを考えれば，いくら強調しても過ぎることはないであろう。だが――これまた繰り返しになるが――こうした一七世紀に生じた絶対主義王権成立の物語には，デュマの一九世紀史にたいする暗喩が込められている可能性もあった。フランス一九世紀は，前世紀末の大革命による第一共和政成立以来，ナポレオン帝政，王政復古，七月王政，二月革命による第二共和政成立と目まぐるしい変化を体験してきた。デュマ自身自由主義者，共和主義者として，こうした政治的変革に積極的に関与してきたわけだが，二月革命による政局の混乱――それは彼にとってもっとも切実な問題として，歴史劇場の経営危機に結び付く――がデュマをして，こうした政治的動乱の連続としての一九世紀史にたいするある種の懐疑を抱かせた可能性はある（すでに『二十年後』において，大革命でのルイ一六世の斬首にたいする作者の懐疑・慚愧の思いが，主人公たちとくにアトスのイギリス王チャールズ一世への異常なほどの加担というかたちで表れている可能性があることは指摘した）。デュマがルイ一四世の絶対権力の成立を――銃士たちやフーケといった敗者への共感の裏返しである距離感を保ちつつ――歴史的必然性の相貌のもとに描いていることには，強大で安定した権力への回帰志向が記されているとも考えられるのである。そして，そうしたデュマの（また彼の小説の読者も共有したであろう）志向性は，数年ののちには，ルイ・ナポレオンの皇帝就任というかたちで実現されることにな

る。

歴史小説の手法のほうに話を移せば，銃士三部作は，実際の歴史的事件のなかに虚構の人物をはめ込み，その人物の活躍によって事件そのものの内実が一変してしまう「歴史異聞」の手法を，三部作を通じて使用していた。その後歴史を扱う芸術作品が頻繁に使用していくことになるその手法をデュマが創始したと言うのではないが，三部作がその普及にもっとも大きな影響を与えた作品であることは確実であった。また，「鉄仮面」の挿話での，国家の政治的暴力・闇とその秘密を利用しようとする秘密結社の暗躍という「歴史奇譚」的テーマの絡みも，その後サブカルチャー的芸術ジャンルが偏愛していくことになるものであり――『三銃士』を初めとする銃士三部作自体が，映画・小説・演劇など多様な領域において，まさにつねにリメイクされ続けていることを含めて――，銃士三部作がサブカルチャー文化史に与えた影響力の大きさはまさに計り知れないものがある。繰り返しになるが，このことは，先ほど述べた歴史観の先見性とともに，デュマ再評価の文脈のなかでとくに強調しておきたい。

最後に，銃士三部作は，主人公たちの人生がその青春時代から死に至るまで描ききられることにより，他のこの手の作品にはない人間的な豊かさを帯びているのであり，『三銃士』のみが脚光を浴びる現状はやや残念な気がする。そのスリリングさでけっして第一作に劣ることはない『二十年後』，さらにはたしかに冗長な部分はあるが，その歴史把握の卓越性において抜きんでる『ブラジュロンヌ子爵』にも，なんらかのかたちで注目が集まることを望みつつ――ひとまず――筆を置きたい。

註

（１）実在の人物としてのダルタニャンのフーケ事件への関与は，以下の書に詳しい。佐藤賢一，『ダルタニャンの生涯――史実の『三銃士』――』，岩波新書，二〇〇二年一〇二－一二八頁。

（２）シモーヌ・ベルティエールも，『ブラジュロンヌ子爵』の執筆構想から実際の執筆には時間的間があり，構想時はイギリス王政復古と宮廷恋愛絵巻という二テーマ構成だったのが，その後実際の執筆を行い始めてから，劇的要素を加えるためにフーケ事件と鉄仮面の挿話が加えられた（その結果，前二作とは比較にならないほどの分量となった）という説を述べている。Simone Bertière,《Introduction》du *Vicomte de Bragelonne,* I, livre de poche classique, 2010.

（３）Cf.Jean-Yves Tadié,《Préface》du *Vicomte de Bragelonne*, I, folio classique, Gallimard, 1997, pp.37-39.

（４）アレクサンドル・デュマ，『ダルタニャン物語』第一一巻，「剣よ，さらば」（鈴木力衛訳），講談社文庫，一九七五年，四三一－四三二頁。Dumas, *LeVicomte de Bragelonne,* III, folio classiqe, Gallimard, 1997, p.762.

（５）Cf. 蓮實重彦，『帝国の陰謀』，日本文芸社，一九九一年，三四－三九頁。

（６）Jeanne Bem,《D'Artagnan et après》, *Littérature,* 22, 1976, pp.28-29.

（７）Cf.萱野稔人，『国家とはなにか』，以文社，二〇〇五年，一六八－一七一頁。

（８）Dominique Fernandez,《Dumas baroque》, in *Le Vicomte de Bragelonne,* I, Robert Lafont, 1991, pp.iii-xxvii.

（９）ちなみに，ここでひとつ付け加えておけば，『ブラジュロンヌ子爵』では，四人の元銃士がそろって顔を合わせる場面はまったくない。三人が集まることはあっても，全員揃うことは周到に避けられている。四人が集まっていたら話の流れは変わったと，デュマは言いたかったのかもしれない。

（10）Fernandez, ar. cit., pp.xxvi-xxvii.